特別寄稿

同志社とカールトン大学

菅原 真理子（大学文学部准教授）

「同志社とかかわりの深い米国の大学」と聞いて、だれもが「アーモスト大学（Amherst College）」、すなわち同志社の創立者である新島襄先生の母校と答えるであろう。しかしアーモスト大学に次いで同志社と親密な関係を築いてきた大学が米国にあることをご存じだろうか。中西部ミネソタ州ノースフィールド市（Northfield, Minnesota）にあるカールトン大学（Carleton College）である。

カールトン大学はアーモスト大学と同じリベラルアーツのカレッジであり、創立は1866年、約2千人の学生が学んでいる。米国のリベラルアーツ・カレッジの中でも、毎年上位10校に入る名門である。そんなカールトン大学と同志社の間には半世紀以上にも及ぶ交流の歴史があり、その歴史に近年新たなプログラムが二つ加わった。

本稿ではまず、近年始動した交流プログラムとその立ち上げの経緯について紹介し、続いて、半世紀以上も前に始まった両大学の交流の歴史についてまとめる。

カールトン大学（カールトン大学HPより）

1　同志社大学におけるカールトン大学オフキャンパス・セミナー

2012年度より大学の国際センター留学生課が受け入れ母体となり、「カールトン大学オフキャンパス・セミナー」（Carleton Off-Campus Seminar）と呼ばれる短期留学プログラムが実施されている。このプログラムではカールトン大学の学生が10人～20人程度、4月上旬から6月上旬までの2カ月間にわたり、継志館およびその他の宿泊施設に滞在し、大学のキャンパスにて日本語の言語学や日本の文化、芸術、宗教などを学ぶ。このプログラムの立ち上げに際し筆者も深く関わってきた。以下にプログラムの内容および立ち上げの経緯を紹介する。

マイケル・フリン教授（2014年4月 良心館にて）

このプログラムはカールトン大学のマイケル・フリン（Michael J. Flynn）教授の構想と働きかけによって実現したものである。2012年度と2014年度には、フリン教授の引率でカールトン大学の学生たちが「日本語の言語学」および「日本文化」を学ぶために本学を訪れた。大学の文学部教員の勝山貴之教授（2012年度と2014年度：日本文化に関するスポット講義）と藤井光准教授（2012年度と2014年度：日本文化に関するスポット講義）、および文化情報学部の星英仁准教授（2014年度：日本語の言語学科目）、そして筆者（2012年度：日本語の言語学科目）も英語で講義を行った。また、近隣の他大学の研究者の方々にも科目担当やスポット講義などでご協力いただいた。

表1　カールトン大学オフキャンパス・セミナー引率教員とテーマ

2012年度	Michael Flynn	「日本語の言語学」「日本文化」
2014年度	同上	
2015年度	John Schott	「日本のニュー・メディア」
2016年度（予定）	Michael Flynn	「日本語の言語学」「日本文化」
2017年度（予定）	Kathleen Ryor	「京都の庭園と日本美術史」
2018年度（予定）	Michael Flynn	「日本語の言語学」「日本文化」
2019年度（予定）	Asuka Sango	「日本の宗教」
2020年度（予定）	Michael Flynn	「日本語の言語学」「日本文化」

（国際センター留学生課提供）

２０１５年度からは隔年ではなく毎年の実施となる。偶数年度は今まで通り、フリン教授が引率し、奇数年度はカールトン大学の他の教員がそれぞれの専門領域をテーマにしたプログラムを実施する。２０１５年度はジョン・ショット（John Schott）教授が、「日本のニュー・メディア」をテーマに引率される。（表１参照）。

このカールトン大学オフキャンパス・セミナーに関して特筆すべきは、日本語研修のためのプログラムではなく、あくまで言語学、芸術、宗教といった学術専門領域から日本への理解を深めることを目的としている点である。さらに、カールトン大学からの留学生たちは本学の学生ボランティアと密に交流することになっており、そこから異文化で生まれ育った同世代の若者同士の理解を促進するという点も特徴的である。

本学の学生ボランティアは「同志社ピアーズ」（Doshisha Peers）と呼ばれ、文学部が主催するカールトン大学サマープログラムに参加する学生達で構成されている。彼らは週末などに神社仏閣や美術館などをカールトン生と共にめぐり、日本の文化や歴史への理解、さらには文化の垣根を越えての相互理解を深めていく。

このオフキャンパス・セミナーが本学で実現するに至ったのは、偶然のきっかけからである。セミナーの立案者のフリン教授は、マサチューセッツ州アーモスト市（Amherst, Massachusetts）にあるマサチューセッツ大学アーモスト校（University of Massachusetts at Amherst）の言語学科出身の言語学者である。文学部英文学科の中井悟教授も同校の言語学科でフリン教授と同時期に学

カールトンからの留学生と同志社ピアーズ（2014年5月良心館にて）

オフキャンパス・セミナーのFarewell Partyでの集合写真
（2014年6月アーモスト館ゲストハウスにて）

ばれており、筆者も同校の同学科にて言語学を修めた身であるというところから縁が生じ、２００６年の秋学期にフリン教授がＡＫＰ（Associated Kyoto Program）の客員教授（Robert Wood Memorial Visiting Faculty Fellow）として本学に滞在されて以来、教授が京都を訪問されるたびに、文学部英文学科の教員たちと交流を深めてきた。

そんな折、２００９年６月にフリン教授は、日本においてカールトン大学のオフキャンパス・セミナーを立ち上げるため、その受け入れ先候補となっていた複数の日本国内の大学と交渉する目的で、再来日されていた。しかし当初、その受け入れ先候補リストには、同志社大学は入っていなかった。というのも本学は既にＡＫＰの受け入れ校となっており、そこに毎年カールトン大学からの短期留学生も参加しているため、フリン教授としては、オフキャンパス・セミナーの受け入れ校は同志社以外にしようという考えがあった。しかし、日本国内で候補となっていた全ての大学を訪問された後に同志社に立ち寄られたフリン教授は、「プログラムに必要な条件を全て満たせる大学がひとつもない」と困惑されていた。そこで筆者から本学を候補と考えてはどうかと申し上げた。というのも当時、本学は「グローバル30」と呼ばれる「国際化拠点整備事業（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業）」に採択されたところであり、海外からの学生の受け入れに本腰を入れ始めたところであった。さらにこのオフキャンパス・セミナー実施に必要な条件も、本学であれば満たすことができるであろうと思われたからだ。その筆者の意見にフリン教授も興味を示されたため、大学の国際センター側の担当者にこのオフキャンパス・セミナーの計画を紹介させていただいた。これを機に、このプログラムを同志社大学で受け入れる話が本格化していった。その後、２０１１年度の春学期にフリン教授を文学部英文学科に客員教授としてお迎えし、その間にも教授は大学の国際センターと密に連携をとられて、２０１２年度からのオフキャンパス・セミナーの実現に至った。

２　カールトン大学における文学部主催のサマープログラム

２０１４年度からは、カールトン大学において文学部が主催するサマープログラム（文学部生対象）も始動している。８月上旬から下旬までの３週間、参加学生たちは現地で語学研修の授業だけでなくアメリカ文化科目も履修する。本プログラムの立ち上げに際しては、文学部英文学科の勝山貴之教授と筆者が、フリン教授と共に構想を練り、文学部事務室の協力のもと、準備を進めてきた。

このサマープログラムの特徴は、単に夏季休暇中にカールトン大学を訪れ、そこで語学研修を受けることだけを目的としているのではない。既に紹介したように、参加者たちは「同志社ピアーズ」という名称のもと、春学期にオフキャンパスセミナーで同志社に短期留学に来るカールトン大生たちと、英語を使って交流を深めることになっている。また、もう一つ特筆すべきは、現地での研修中に、ホームステイではなく、カールトン大学

の学生寮で「カールトン・ピアーズ」（Carleton Peers）と呼ばれるカールトン大生のアシスタントらと共に生活し、寮生活を通してアメリカの大学生の日常を体験する点である。カールトン・ピアーズは、本学でのオフキャンパス・セミナーに短期留学した学生たちで構成されているため、彼らは日米の両大学にて友情を深める機会を与えられる。

２０１４年度は23名が参加し、キャンパスでの研修に加え、地元の人々のお宅訪問、彼らを招いてのジャパニーズ・ディナー・パーティー、ミネソタ・ツインズの野球試合の観戦など様々なイベントを体験した。春学期に同志社で知り合ったカールトンの友人と、夏にカールトンのキャンパスで再会を果たせたことが一生の思い出となったと感想を述べた参加者もおり、このような交流から、同志社とカールトンの若者が強い絆で結ばれ、延いては将来における日米の懸け橋となる人物に育ってくれるものと信じている。

3　同志社とカールトン大学の交流の歴史

本稿のタイトルは「同志社とカールトン大学」であるが、今から半世紀もさかのぼること１９６３年６月発行の『同志社時報』第４号には、「カールトン大学と同志社」という記事が掲載されている。当時、ＣＩＪ（Carleton-in-Japan）と呼ばれていたプログラムの一環として、カールトン大学から本学に代表として派遣されていたペリオ・リッチェル（Perry-O Richel）氏によるものである。このＣＩＪプログラム、およびそこから派生した

文学部主催サマープログラム現地での研修風景
（2014年8月ノースフィールド市内の自然食品マーケットにて）

文学部主催サマープログラムでの集合写真
（2014年8月カールトン大学にて）

カールトン・ハウスという学生寮での若人たちの交流が、本学とカールトンの学生や教員たちの最初の交流の場であった。

ＣＩＪプログラムとカールトン・ハウス

『同志社百年史』によれば、同志社におけるＣＩＪプログラム発足には、「偶然の要素が強かった」（通史編２、１３２７頁）と記述されている。１９００年代初頭より、アメリカン・ボード（American Board）の支援の下、カールトン大学はカールトン代表を中国のミッション系の学校に派遣し、英語教育などの教育活動を行っていた。しかし１９４９年に中国共産党が中国全土を掌握すると、中国でのカールトン代表のミッションは終焉を迎える。たまたまその頃、同志社では岩倉の高校で教えていた宣教師が任期を残して日本を去らねばならなくなり、急遽後任を探していた。そこで大学のオーティス・ケリー（Otis Cary）教授が、アメリカン・ボードで当時の東洋部長をしていた叔母のアリス・ケリー（Alice E. Cary）氏に相談すると、アメリカン・ボード側は、中国での派遣先を失っていたカールトン代表を同志社高校の宣教師の後任とするよう提案した[1]。その結果、１９５３年にミルトン・ビアマン（Milton L. Bierman）氏が、同志社における初代カールトン代表として、高校に派遣された。これがＣＩＪプログラムの始まりであり、以降15年以上にわたり、カールトン大学を卒業して間もない10人の若者がカールトン代表として同志社に派遣されることになる[2]。当初は男性の代表が派遣されていたが、１９５７年に第３代代表のナンシー・ウィンチ（Nancy E. Wintsch）氏が派遣されて以降は、代表は女性のみとなり、今出川の中学校および女子中学校・高等学校で教鞭をとることになった。

このプログラムは、開始してから60年代初頭まではアメリカン・ボードが介在していたため、初期の代表たちは「宣教師」としての資格で派遣されていた。しかしプログラムの財政面は、カールトン大学の学生団体が学生達から集めた資金によって賄われていたため、徐々にカールトンの学生達から宗教的中立性を求める声が上がり始め、本節の冒頭で紹介したペリオ・リッチェル氏が第５代代表として派遣されてから間もない１９６２年になると、ＣＩＪプログラムはアメリカン・ボードの管轄から独立し、「宣教師派遣」としての側面は失われた（*Carleton College Archives* より）。それと同時に、

表2　歴代のカールトン代表

1953-55	Milton L. Bierman
1955-57	Paul V. Griesy
1957-59	Nancy E. Wintsch
1959-61	Dorothy A. Wilson
1961-64	Priscilla P. (Perry-O) Richel
1964-66	Nancy L. Staab
1966-67	Marilyn Garbisch
1967-68	Nancy Hazard
1968-69	Ann Cross
1969-71	Jody A. Hymes

『同志社百年史』および *Carleton College Archives* より

リッチェル氏は大学のケリー教授の助手として大学における英会話の授業で活躍するようになる。これはリッチェル氏が、カールトン代表が年齢の近い大学生と教室でも交流できるようにすることで、CIJプログラムをより実りあるものにするために、当時の大塚総長と上野学長に熱心に働きかけた結果であり、以降、カールトン代表の活躍の場は大学へと移って行った[3]。

もうひとつ、カールトン代表が女性になってから変わったことといえば、旧新島会館の2階の一部が、カールトン代表と大学の女子学生（5人～10人程度）が共同で生活する女子寮となったことである。この女子寮は、「カールトン・ハウス」（Carleton House）と命名された。1965年には、場所を旧新島会館から寺町通りの京極小学校南側の日本家屋に移したが、移動前も移動後も、カールトン・ハウスはカールトン代表と本学の学生たちとの交流の場として重要な役割を果たしてきた。

本節冒頭で紹介したリッチェル氏による『同志社時報』の記事によれば、カールトン・ハウスには週一度、様々な学部や学年の大学の学生が集まり「大学教育を受けた女性の社会的役割」「学生のあり方」「マス教育」「時事問題」などについて議論をしたりと、当時の学生ならではの青春を謳歌していたようである。1964年から67年までカールトン・ハウスで寮生として生活し、67年に文学部卒業後、物理学者である夫と共に米国ニュー・ジャージー州のプリンストンに移り住まわれた岡林（旧姓・福中）佐保子氏は、筆者への書簡にて、カールトン・ハウスは「今のように海外旅行が簡単でない時代、大変ユニークで貴重な経験」、「完全自治寮で食事も当番制、ミーティングも英語、代表のための日本語だけの日、色々な先生方をお迎えしての講演会など、かけがえのない思い出」と述べている。また、岡林氏は半世紀が経過した今日でも当時のカールトン代表（第6代代表）であったナンシー・スターブ（Nancy L. Staab）氏（結婚後、Staab から Traer へと姓は変更）と家族ぐるみで親しくされているとのことである。このようにまだ海外と行き来が容易でなかった時代に、カールトン・ハウスが大学に集う若者の視野を広げるために果たした役割は大きい。

旧新島会館（同志社社史資料センター提供）

このカールトン・ハウスに関して、もう一点特記すべきは、1959年に発足した「カールトン・ハウス委員会」である。この委員会の中心メンバーは、文学部の岩山太次郎先生（現在、大学名誉教授）ご夫妻、同じく文学部の大下尚一先生ご夫妻（大下先生の夫人は、当時大学で嘱託講師として教鞭をとられていた大下道先生で、現在は京都造形芸術大学名誉教授）、そしてカールトン大学を卒業し、イエール大学でPhD（博士号）を取得された後、帰国されて間もない麻田貞雄先生（現在、大学名誉教授）であった。メンバーたちは、カールトン代表やカールトン・ハウス寮生の相談役となったり、入寮する学生の面接などにも携わった。上記のリッチェル氏も自身の記事の中で、委員会メンバーの教員たちによるサポートのもと、楽しく代表としての責任を全うできたと述べている。それから30年以上が経過した1997年、岩山先生（当時は文学部教授であり学長）はカールトン大学より名誉学位を授与される[4]。岩山先生によれば、この学位授与式には元代表のリッチェル氏（アイオワ州在住）とスターブ氏（カリフォルニア州在住）もお祝いにかけつけたとのことである。そんな逸話からも、カールトン・ハウス委員会の教員たちとカールトン代表とが、強い絆で結ばれていたことをうかがい知ることができる。

しかし、学生運動が隆盛を極めた1960年代の終わりになると、カールトン代表と本学の学生や教員たちとの交流に暗雲が立ち込める。AKPの創始者のひとりで、当時の同志社大学とカールトン大学の関係に詳しいカールトン大学名誉教授のバードウェル・スミス（Bardwell Smith）氏によれば、同志社の大学紛争にカールトン・ハウスおよびカールトン代表が巻き込まれることを危惧したカールトン大学側が、寮の閉鎖と代表派遣の中止を求め、第10代代表のジョディー・ハイムズ（Jody A. Hymes）氏を派遣したのを最後に、カールトン・ハウスは閉鎖され、代表派遣のプログラムも打ち切られてしまった。その後、カールトンからの代表派遣は再開されることなく、現在に至る。しかし本学とカールトン大学との交流の灯はこれで完全に消えてしまったわけではなかった。次項で紹介するように、AKPという新しい形での交流の芽が育まれようとしていた[5]。

AKPの発足

カールトン大学は、上記の代表派遣に加え、日本研究の短期留学プログラムも同志社大学にて実施してきた。そしてこのカールトンからの短期留学プログラムが素地となり、AKP（Associated Kyoto Program）、すなわちアメリカの名門リベラルアーツ・カレッジからの留学生が、日本語や日本文化などの「日本学」を学ぶプログラムが発足するに至った。

まず1965年から71年にかけて、カールトン大学は本学にて夏季プログラム（Japan Summer Seminar at Doshisha）を開催してきた。『同志社―百年の歩み』によれば、これは、米国でアジアへの関心が増したため、カールトン大学がアジア研究をカリキュラムの一部として設置したことに端を発していた。

さらに68年になると、夏季プログラムで学んだ学生たちのうちの希望者が秋学期にも同志社大学に留まり、日本研究を続けることのできる秋学期プログラム（Carleton-Doshisha Fall Term Program）も始まった。前項で紹介したカールトンのスミス教授は1969年に夏季プログラムを率い、本学にて日本の宗教についての研究に携わった。しかしその後、先にも触れたように、同志社での学園紛争の激化を懸念したカールトン大学は、これらの留学プログラムも1971年を最後に打ち切ってしまう[6]。しかしスミス教授はこのカールトンからの短期留学プログラムのスピリットを継承し、アーモスト大学のレイ・ムーア（Ray Moore）教授と共に、故・浅香正名誉教授の熱意ある協力のもと、1972年にAKPを同志社大学内に設立した。これにはコールビー、コネティカット、マウント・ホリヨーク、オベリン、スミス、ウェスリアン、ウィリアムズなども加わった。さらにその後、ベイツ、バックネル、ミドルベリー、ポモナ、ウィットマンなども加盟し、現在は14のリベラルアーツ・カレッジで組織されたプログラムへと成長し、毎年20～30人程度の学生が本学のキャンパスで日本語および日本文化を学んでいる。

4　同志社とカールトン大学の交流の未来に向けて

このように、本学とカールトン大学との交流の歴史を概観してみると、偶然から始まった関係とはいえど、過去半世紀の間に常に何らかの形で継続して人的交流があったことがわかる。そして今、新たに二つのプログラムが加わった。両大学の関係部署の教職員は、互いの大学の学生たちに有意義な学びと交流の場を提供するために、日々、労を惜しまず密に連絡を取り合い、プログラムの発展に貢献している。筆者はこれらの交流プログラムの準備段階で、小規模なリベラルアーツ・カレッジという性格を持つカールトン大学の教員たちのきめ細やかな学生へのサービスから多くを学んだ。そこで学んだことを、今後、同志社での教育に生かしていきたいと考える。また、総合大学である本学だからこそ、カールトン大学のオフキャンパス・セミナーでのプログラム内容を満たすに足る人材や施設の提供が可能である。このように、両大学は互いの長所から多くの恩恵を得ている。今後も両大学の特徴を生かし、互いの学生と教職員が共に成長できる場としての交流プログラムが存続していくことを切に願う。

《注釈》

1　カールトンは同志社への派遣を開始する前に一度だけ、1951年から53年にかけて梅花女子大学に代表を派遣している。

2　1966年にCIJは、Carleton-Doshisha Fellowshipへと名称変更した。

3　ペリオ・リッチェル氏が、自身が第5代代表として同志社へ派遣されるに至った経緯、船での渡日や同志社での思い出などを語ったインタビューを、*Carleton College Archives*の以下のサイトで聞くことができる。
https://archivedb.carleton.edu/?p=digitallibrary/digitalcontent&id=77183

4　岩山名誉教授によれば、カールトン大学からの名誉学位の授与は、AKPの発展に尽力された故・浅香正名誉教授が、カールトン大学に対して、AKP支援に力を注いできた同志社大学の学長への名誉学位の授与を推されたことによるという。それにより1986年には、当時の木枝燦学長もカールトン大学より名誉学位を授与されている。

5　*Carleton College Archive* によれば、当時文学部の専任教員であった秋山健先生（後に上智大学教授となる）が、"non-student representative for Carleton" としてカールトン大学に代表として派遣されており、カールトンからの代表を同志社が一方的に受け入れるだけであったわけではないということがわかる。

6　*Carleton College Archives* によれば、最後のカールトンからの夏季プログラムを率いたのは、ロバート・ウッド（Robert Wood）教授である。ウッド教授は1949年から68年までの約20年間、同志社大学神学部にて教鞭を執られた後、カールトン大学へ移られた。

《参考文献》
Carleton College Archives（カールトン大学アーカイブ）
https://archivedb.carleton.edu/
学校法人同志社（編）（1976）『同志社―百年のあゆみ』
学校法人同志社（編）（1979）『同志社百年史』通史編2
岩山太次郎（2014）「浅香正先生を偲ぶ」『同志社タイムズ』第701号
リッチェル、ペリオ（1963）「カールトン大学と同志社」『同志社時報』第4号、38―40頁

《謝辞》
本稿執筆にあたり、以下の方々（姓アルファベット順）および組織に御礼を申し上げる。
マイケル・フリン氏（カールトン大学教授）、岩山太次郎氏（大学名誉教授）、勝山貴之氏（大学文学部教授）、森一郎氏（元女子中高校長）、岡林佐保子氏（大学文学部同窓生）、バードウェル・スミス氏（カールトン大学名誉教授）、大学文学部、大学国際センター留学生課、大学広報課、大学社史資料センター、大学英文学会、中学校・高等学校、女子中学校・高等学校